

## メモ帳の片隅: / 5 よそ者であれ、何であれ / 福島

毎日新聞 2013年09月12日 地方版

小名浜のソーブランドを舞台にした芝居「泡」を先週、郡山市で見た。溝口健二の映画「赤線地帯」の男気のある遊郭主をほうふつとさせる店主。新宿・歌舞伎町から流れてきたやる気のない女性。漁ができず気合が薄れていく船長。何かと言いたがりの原発作業員。少し極端な人々が繰り広げるドタバタ劇は、ネオン街のような原色の舞台の色がうまく絡まり、見ている心地よかった。

作、演出のきたむらけんじさんは「福島で暮らす人々の何気ない日常を描くことこそ大切」とチラシの中で訴える。「人生悪いことばかりじゃない」「前向きに生きよう」というメッセージが浮かぶが、役者の動きなど細部が生き生きしている分、そんな単純な言葉がずっと心に入り込む。

芝居を見る前、演劇関係者から批判を聞いていた。その一つは「なぜソーブランドを舞台にしたのか」というものだが、答えは舞台にある。復興のための融資を断られた店主が「風俗業への差別だ」と憤る場面があり、ソーブランドを舞台にして何が悪いのかという作り手の言い分が込められていると私は感じた。その通り。語り部に誰を選ぼうが自由なはずだ。

もう一つは「作り手たちが被災の当事者ではない」という批判だ。証言者でもある当事者が描く舞台にこそ意味があり、よそ者に福島を利用されたくはない、という嫌悪感だ。

でもこの矛先は全ての人に向かう。中通りの人に浜通りはわからない。浜通りの人でも、立ち直った人には本当にひどい目に遭った人の気持ちはわからない、と突き詰めていけば、原発の技術者や作業員にしか事故は語れないとなる。

現場を一目見ただけで何かを感じ取る人もいる。事故を知った欧州人が、日ごろの怠慢を脱ぎ去り一気に脱原発に動いたのは、当事者だからではない。自分の身に起きたかもしれないと受け止める感受性が少なからず働いたからだ。当事者とよそ者の間に壁をつくってはいけない。「泡」を見た私は、改めてそう感じた。【郡山支局長・藤原章生】